特集論文

「出会い」とその後の妻の夫婦関係満足度の推移

田中 慶子
（公益財団法人 家計経済研究所 研究員）

1. はじめに

これまでの日本の夫婦関係は、典型的なイメージとして、「子は鎹」となって、たとえ夫婦関係が不和であっても離婚しない（できない）というものがある。しかし、近年では、「愛情のない夫婦は離婚すべき」であり、「子どものために離婚しない」という考えに否定的など、夫婦はいつでも解消可能な関係へと変化している。結婚しても決して安泰とはいえず、どのような夫婦が幸せな結婚生活を送っているのか、結婚――有配偶であるという地位、あるいは配偶者の存在――が、個人にとってどのような恩恵をもつのかなど、結婚の「質」への関心が高まっている。

しかし、実際に日本の夫婦関係の「質」について、またその変化の軌跡を俯瞰的に捉えた研究は多くない。現在では夫婦関係は50年近くにわたって継続する。結婚直後だけではなく、数十年たっても幸せな夫婦とはどのような特徴があるのか。あるいは、夫婦はどのような危機を経験しているのかということは、心理学的なアプローチから臨床ケースとして個別に捉えられているものの、全体像が十分に捉えられているとは言い難い。「消費生活に関するパネル調査」（以下、JPSC）は全国サンプルで、1年ごとに情報を取得している、家族（世帯）や個人のパネルデータの中でも長期間継続中のデータである[1)]。このような毎年の記録をもとに、結婚生活が長期間継続している夫婦の妻の夫婦関係満足度はどのような変容をとげていくのか、その軌跡をたどることができる。日本の夫婦関係のあり方やその「質」についての全体像の一端を知るうえで、パネルデータによって計量的に捉えることは意義があるだろう。

第19回（2011年）の調査では、第1回（1993年）で尋ねた妻からみた配偶者に対するイメージや、新規に夫婦の「出会い」についての情報を得ている。さらにJPSCは毎年回答し、かつ初婚を継続している多くの女性についての長期にわたる家計や生活時間など家族生活についての豊富なデータを蓄積している。また、調査期間中に結婚した対象者も多く、結婚生活や夫婦関係がどのように変容をとげるのか、結婚前、そして結婚初年度から追跡していくことができる。

これらのデータの特徴を生かして、本稿では妻からみた夫婦関係満足度の長期的な推移について「計量的モノグラフ」ともいうべき記述を行い、夫婦関係の中長期的な発達的変化について検討することを目的とする。

2. 1990年代以降の結婚と夫婦関係――コーホート間での差異

JPSCの対象者（1959年生まれ～1984年生まれ）の夫婦関係の発達的変化を考える前提として、結婚あるいは夫婦関係をとりまく全体の動向について、JPSCの4つのコーホート間での違いに注目しながら確認しておく。周知の通り、1990年代以降、未婚化・晩婚化は進展しており、コーホートAはまさに女性で晩婚化を経験した先鋒となるコーホートである。20代後半女性の未婚率は、1990年

（≒コーホートＡが該当）では40.4％だったのが、2010年（≒コーホートＤが該当）では60.3％まで上昇している（総務省統計局「国勢調査」）。また、コーホート別に初婚年齢をみると、1960年生まれ（≒コーホートＡに該当）では24歳であったが、1980年生まれ（≒コーホートＤに該当）では（まだ未婚者が多く完結していないため、今後変化がある可能性があるが）26歳まで上昇しており、結婚年齢1歳ごとに人口当たりの結婚数をくらべると、そのピークが低くなっており、コーホートＡでは確かにあった「適齢期」が後生コーホートほど明確ではなくなっている（厚生労働省「平成22年度「出生に関する統計」の概況」）。

また、出会いから結婚へ至るプロセスも変化した。かつては「お見合い結婚」が多かったが、1960年代後半を境に「恋愛結婚」が増加し、現在では9割近くにのぼる。しかし、1980年代には見合い結婚が3割あったため（国立社会保障・人口問題研究所「第14回出生動向基本調査」）、コーホートＡとコーホートＤの間で見合い結婚の位置づけが変わっていることが予想される。恋愛結婚の場合でも、出会いのきっかけが職場から友人関係を介した出会いが多くなっている（岩澤 2010）。そして、交際期間についても、1990年代前半までは交際期間の平均は3年以内であったが、2010年には平均が4年を超えている（国立社会保障・人口問題研究所「第14回出生動向基本調査」）。

このように、1990年代を転換点とし、その後の20年間でも出会いから結婚へと至るプロセスは大きく変容している。コーホートＡでは見合いや職場での出会いをきっかけとして20代前半の「適齢期」前後で多くの女性が結婚していたが、現在では30代でも半数が未婚であり、結婚する／しない、あるいは、いつ結婚するのかは個人の「選択」の要素が大きくなってきたと言えるだろう。このように結婚することの意味やプロセスが、コーホート間で差異をもつようになっており、各コーホートで経験を比較することも重要である。JPSCでは、1990年代を転換点とする「結婚」の大きな変化を経験している世代を追跡しており、コーホート単位で変化のプロセスを検証することが可能である。

では、「出会い」の構造の差異は、その後の結婚生活にどのような影響があるのだろうか。一般的にお見合いと恋愛での結婚を比較した時に、結婚生活のスタート段階の「初期値」が違う、つまり結婚生活に求めるものや、配偶者との関係性への期待も異なるのではないだろうか。お見合いでは結婚を前提としているため相対的に交際期間が短く、また仲介者によって相手の人柄や経済力などが保証されている。一方、恋愛結婚の場合は、カップルが友人や職場などの出会いであれば、高密度なネットワークをもてる可能性があり、基本的には結婚する／しないも含めてカップル間で決定できるため、結婚への期待や希望が事前に調整されやすいと考えられる[2)]。

また、初婚年齢の分散が大きくなってきたことで、若く結婚するか、標準的な年齢で結婚するか、遅く結婚するかによって（もちろん配偶者の年齢次第であるが）結婚生活の様相も異なるであろう。同じ新婚夫婦でも20代の夫婦と30代後半の夫婦では、経済力や配偶者に対する期待が異なると考えらえる。

このような問いは学術的な研究課題というよりも市井の関心であると思われるが、データがなく実態はよくわかっていないのではないだろうか。中長期的な夫婦関係満足度の推移において、出会いの違いや交際期間、結婚タイミングによる差があるのかをデータで示してみたい。

３．夫婦関係の「質」とその発達的変化に関する先行研究――満足度はＵ字カーブを描くか

ところで夫婦関係の「質」に関する研究は、日本の家族研究において諸外国と比較してさほど進んでおらず（永井 2011）、また夫婦関係の発達的変化という問題は家族研究にとって基本的な問題であるにもかかわらず、わが国において適切なデータに基づいた経験的研究はほとんど存在しない（稲葉 2004）。

その背景に、日本の離婚率がさほど高くなく、婚前に同棲することも一般的ではないため、カップル関係の解消が少なく、多くの人にとって安定的なカップル関係の形成・持続の方策をあえて問

う必要がないためであろう[3)]。しかし、それだけではなく、日本の家族研究は、戦後の家族変動――家父長的なイエから民主的な家族、さらに近代家族へという変動に多大な関心を寄せてきたが、形態の観察が中心である。夫婦関係研究においても、性別役割分業をめぐる家族内部の役割構造の研究が中心であり、家事・育児や近年ではワーク・ライフ・バランスなどへの関心が高い。変化に注目する場合でも家族形成期、とりわけ子どもの誕生や、中年期の妻の再就職などイベントの発生による移行の局面が中心的なテーマであり、中長期的なカップル関係の継続性や安定性への関心は高くない。そのため、夫婦関係の「質」とは何か、概念も曖昧であり（上子 1993)、測定についてもさまざまな項目があり、多様な方法が混在している。

一般に夫婦関係や結婚生活の「質」については、「現在の夫婦関係に満足していますか」という、夫婦関係満足度（結婚満足度）の質問によって評価されることが多い。これまでの研究では、夫婦関係満足度は、夫婦で一緒に行動している、夫婦ともに健康である、（妻が）家事分担が公平だと感じている、金銭的に豊かな夫婦で高いことが明らかとなっている。そのような条件を考慮しても、中長期的にみると結婚してからの年数の経過に伴って満足度は低下し、結婚14年目あたりを底として、また上昇するU字カーブを描くことが知られている。結婚直後は「ハネムーン効果」で満足度は高いが、徐々に満足度が低下していく理由としては、子どもの誕生によって夫婦にさまざまな緊張が生じ、夫の育児協力の低さ、時間がたって配偶者に対する関心の低下が指摘されている（木下 2004; 永井 2005など)。

実際に日本の大規模な横断データでは、「日本版総合的社会調査（JGSS)」（岩井・佐藤 2002）でも、「全国家族調査（NFRJ)」の1999年、2004年、2009年3時点いずれをみても（稲葉 2004, 2011)、U字カーブを描くと結論されている。

稲葉（2004）の整理によれば、アメリカの家族研究におけるU字カーブ仮説への批判として、1）ライフステージの効果自体が小さくてあまり説明力がない、2）子どものいない夫婦でも満足度は低下しており子どもの効果だけでは説明できない、3）サンプルのセレクションバイアスの問題、4）コーホート効果であるというものが挙げられている。しかし、NFRJの検証結果からはU字カーブを描くのは子どもをもった夫婦に典型的だが、子どものいない夫婦にも類似した傾向がみられ、日本ではライフステージに応じた職業生活の変化による影響を考慮する必要性を示唆している。

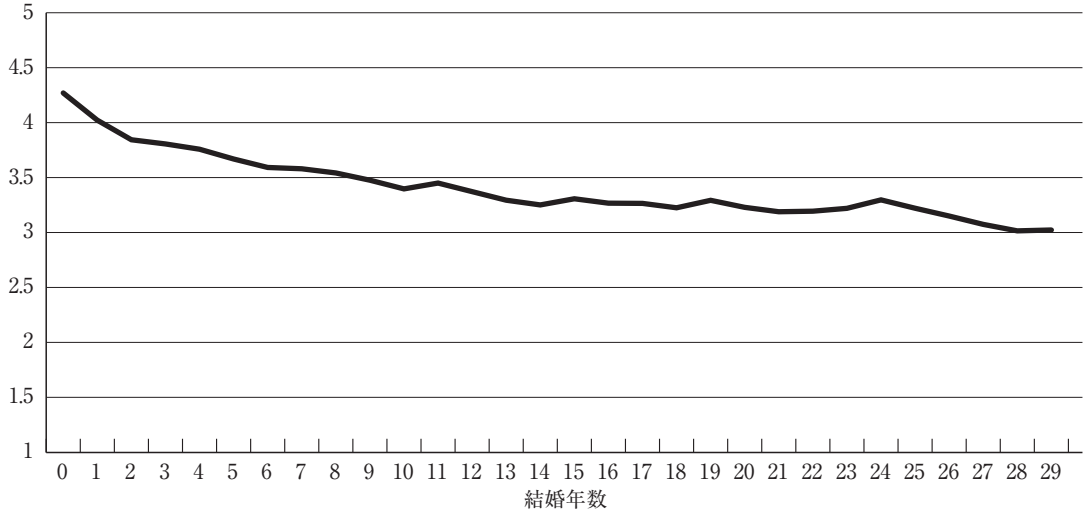
一方、パネルデータを用いた結果からは、U字カーブを描くことはなく、ほぼ一貫して夫婦関係満足度は低下するという（永井 2011; VanLaningham et al 2001)。JPSCを用いた永井（2011）によれば、結婚初期の満足度の低下が著しく、未就学児の子どもがいる場合の満足度は低い。また、結婚経過年数によって結婚満足度の規定要因は異なっており、新婚期では夫の家事・育児時間が満足度を上昇させるが、それ以降は夫の年収と休日の家事・育児時間が妻の夫婦関係満足度を規定している。つまり、ライフステージによって役割構造も変化するとともに、妻が配偶者への役割期待を修正した（つまり、夫に期待しなくなる）結果であるというものである。特に日本の夫婦関係において「亭主元気で留守がよい」といわれるような関係性があるが、なぜ、そのような関係性でも（欧米社会のように）離婚しないのかということの解釈は、日本の家族を理解するうえで重要であろう。妻は「結婚生活に期待することなく、女性があるいは互いに、忍従あるいは無関心の日々を送ってきた可能性」という永井（2011）の指摘は注目すべきであろう。

以上のように、夫婦関係満足度によって夫婦関係の「質」が、中長期的にどのような変容をとげるのかを観察するにあたって、U字カーブを描くのかが論点となる。本稿では、パネルデータを用いてさまざまな要因と夫婦関係満足度の長期的な推移を素描し、1990年代以降の夫婦関係の「質」について確認していく。

4．方法と対象

本稿では、JPSCの第1回から第19回の間に再

図表-1 結婚年数別　夫婦関係満足度



婚を経験した者を除き、夫婦関係満足度の回答がある有配偶者（つまり、初婚継続）に限定して分析を行う。夫婦関係満足度は、「あなたは現在の夫婦関係に満足していますか」という問いに非常に満足している～ふつう～まったく満足していない、の5段階評価となっている。調査が隔年だった時期もあるため、データのばらつきが大きくなっている[4]。分析は各調査回を結婚年に変換し、先行研究で夫婦関係満足度の規定要因として、夫の学歴、子どもの有無、夫の年収を統制変数とし[5]、次の5つの要因ごとに平均値を算出した。

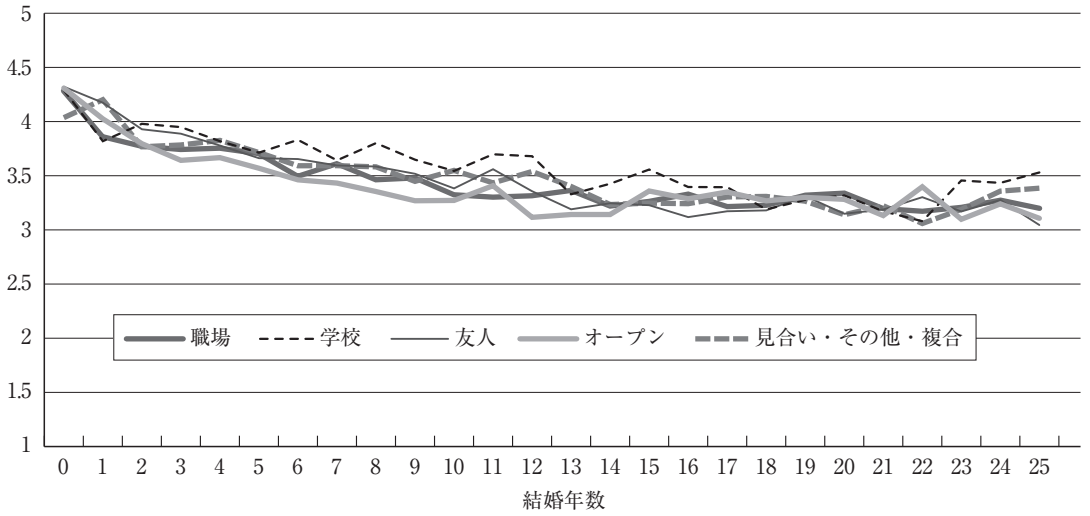
1) 出会いのきっかけ：第19回調査では15の選択肢の複数回答で出会いのきっかけを尋ねている。多くの者は回答が1つだったので、職場、学校、友人、オープン、お見合いなどの5グループに分類した。該当する選択肢の内容は以下の通りである。

職場：職場の同僚・上司の紹介で／職場で
学校：学校の授業・部活・サークル活動で
友人：友人・知人・幼なじみの紹介で／合コンで
オープン：アルバイト先で／趣味・習い事で／インターネット・携帯を通して／街中や旅先で
お見合い・その他・複合：お見合いで／お見合いパーティーで／結婚相談所や結婚仲介サービスで／その他／上記の選択肢を複数挙げている者

2) 交際期間：5年ごとの出生コーホート別に交際期間を、平均よりも長いか短いかで2区分した。1970年代生までのコーホートでは、2年以内かそれ以上かで、1980年代生まれでは3年以内かそれ以上が区切り値となった。
3) 結婚タイミング:コーホート別の初婚年齢のピーク年齢[6]を基準とし、±1歳を標準、2年以上早い場合を早婚、2年以上遅い場合を晩婚とする。
4) 出生コーホート：ここでは、西暦の出生年5年区切りで観察する。サンプルを確保できる1960年代後半、1970年代前半、1970年代後半の3つのコーホートのみを用いる。
5) 結婚コーホート：結婚タイミングと出生コーホートの組み合わせとなる、結婚時期によるコーホートを作成した。ここでは、1990年代前半まで、1990年代後半、2000年前半、2000年代後半の4グループに分けて比較する。

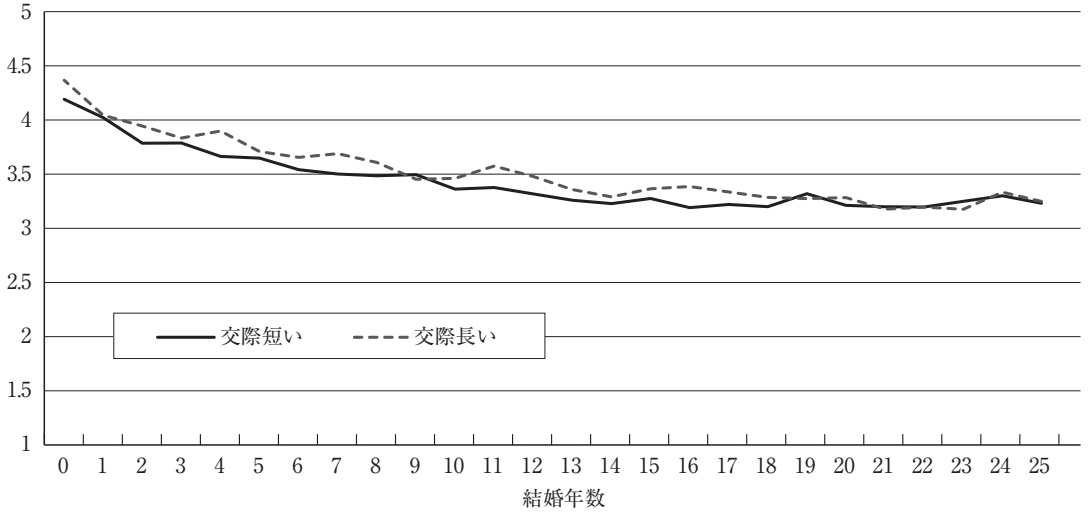
次に、第1回調査からの継続回答者を対象に、第19回での夫のイメージと比較を行う。「あなたにとって、今のご主人はどのような存在ですか」という質問に対して第1回調査（1993年）では、有配偶の女性に15個の選択肢（選択肢の詳細は図表-7参照。ワーディングは微修正を加えている）から、1位から3位までを選択する方法で、第19

図表-2 配偶者との出会いのきっかけ別　夫婦関係満足度



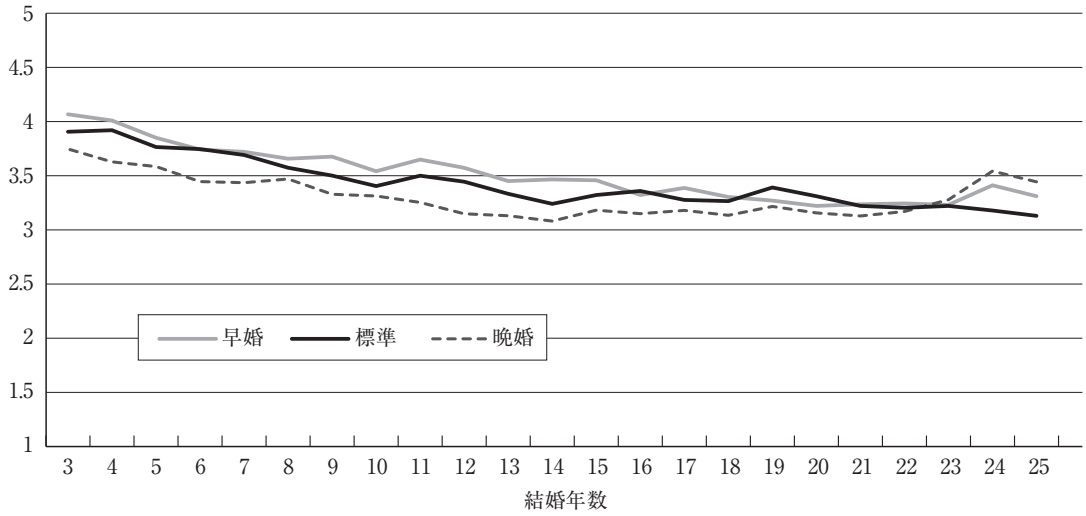
注: 出会いのきっかけの回答は複数回答。選択肢の内容は次の通り。
「職場」は職場の同僚・上司の紹介、職場での出会い
「学校」は学校の授業・部活・サークル活動での出会い
「友人」は友人・知人・幼なじみの紹介、合コンでの出会い
「オープン」はアルバイト先、趣味・習い事、インターネット・携帯、街中や旅先で
「見合い・その他・複合」はお見合い、結婚相談所、その他での出会いと、上記の選択肢のうち複数を挙げた者

図表-3 平均交際期間　夫婦関係満足度



注: 交際期間の区分はコーホートの中央値によって2区分した。
1970年代までの出生コーホート:2年以内/それ以上
1980年代生まれ:3年以内/それ以上

図表-4 結婚タイミング別　夫婦関係満足度の推移



注: 結婚タイミングの区分はコーホートの初婚年齢を基準に以下のように作成した。
早婚:平均初婚年齢から－2歳以上で結婚
標準:平均初婚年齢から±1歳の範囲で結婚
晩婚:平均初婚年齢から+2歳以上で結婚
平均初婚年齢は、厚生労働省　「平成22年度「出生に関する統計」の概況」をもとに1959～1964年コーホートまでは24歳、1965～1975年コーホートまでは25歳、1980～1984年コーホートは26歳と設定した

回調査では「家事や育児に協力的な人」を加えた16個の選択肢の中から、夫のイメージに最も近いものを1つ選択する方式で尋ねている。

5．結果

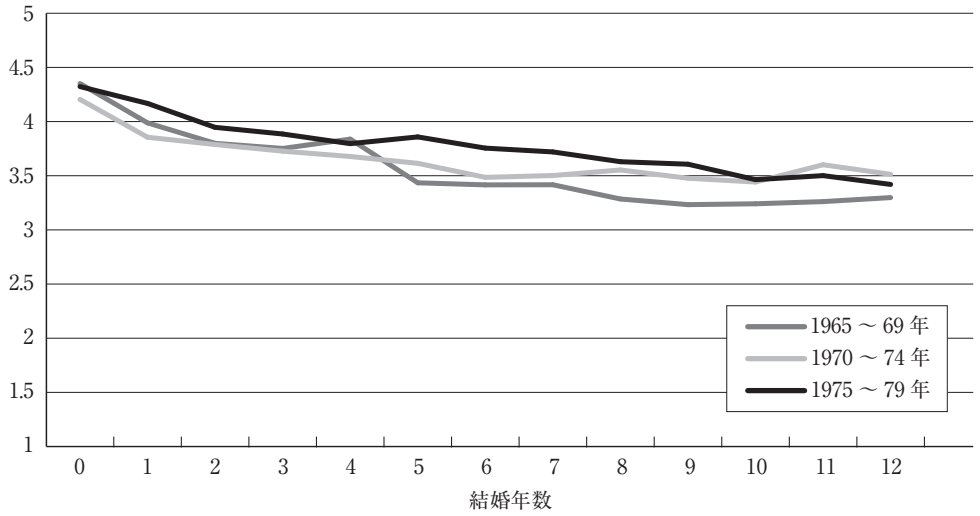
まず該当サンプル全体の夫婦関係満足度の推移を確認する。すべてのデータをプールし、統制変数を投入して算出した夫婦関係満足度を、サンプル数が確保できる29年目まで示したのが図表-1である。永井（2011）と同様、U字カーブではなく（多少の上下はあるものの）漸減傾向であることが確認できる[7]。

(1)「出会い」と結婚の状況別にみるその後の夫婦関係満足度

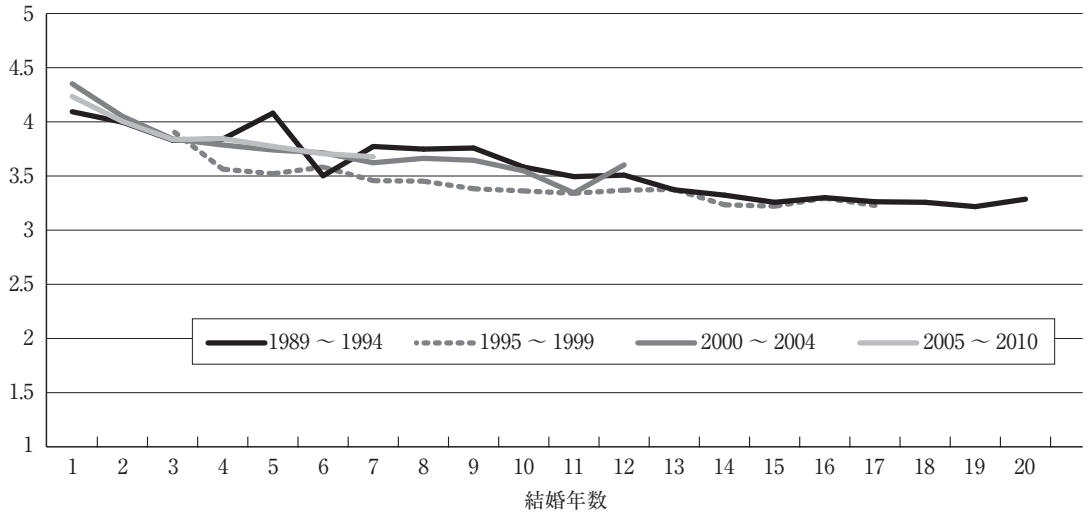
続いて、先述の要因ごとに夫婦関係満足度の推移をみていこう[8]。図表-2では、出会いのきっかけ別に夫婦関係満足度の推移を示した。これをみると、大きく学校で出会った夫婦の満足感が高く、オープンな場で出会った夫婦の満足度がやや低く推移する傾向があるものの、統計的には有意な差はなく、どのような出会いのきっかけであっても漸減傾向である。また結婚当初の段階でも、出会いのきっかけによって満足度に差はないことが確認できる。図表-3には、交際期間別の夫婦関係満足度の推移を示した。こちらも、交際期間が長い方が満足度はやや高く推移しているものの、両者に差はない。やや大雑把な整理であるが、JPSCからは結婚までのプロセス（出会いのきっかけ・交際期間）がどのようなものであれ、結婚後の満足度の初期値に違いはなく、その後、長く夫婦を続けていくと配偶者に対する満足度は低下している。また、結婚のタイミング別にみたものが図表-4である。これをみると、晩婚の者では他と比べやや満足度が低く推移している。結婚初期の満足度の高さも異なり、14年目あたりまでの傾きもやや大きい。ただし、20年目以降回復傾向が見られることは注目される。

次にコーホート間比較として、妻の出生コーホート別の推移を図表-5に示した。比較できる結婚期間が短く、晩婚者が追加されるため確定的ではな

図表-5 妻の出生コーホート別　夫婦関係満足度の推移



図表-6 結婚コーホート別　夫婦関係満足度の推移



いが、傾向として1970年代後半コーホート（おそらくコーホート内の早婚者）ではやや高く推移していること、1960年代後半コーホートと1970年代前半コーホートを比較しても、1970年代前半コーホートの方が全般的に満足度はやや高く、未婚化・晩婚化の進展した後生コーホートでは結婚する者自体のセレクションバイアスを検討する必要があるだろう。一方、結婚コーホート別の推移を示した図表-6では、1990年代後半に結婚した妻の満足度がやや低い傾向を確認できる。結婚10年目前後が2000年代後半という計算になるが、どのような時代要因があるのか、今後の検討課題としたい。

以上のように、中長期的な夫婦関係満足度の推移からみると、結婚タイミングや、出生コーホート、それらを組み合わせた変数である結婚する時期は夫婦関係満足度に何らかのインパクトをもつことが示唆される。一方で、出会いの構造は、夫婦関係満足度からみた評価という面では、その後の夫

図表-7 夫のイメージの変化（1993年⇒2011年）

出現順	%
心の支え⇒心の支え	8.8
心の支え⇒人生に共に	7.6
人生に共に⇒人生に共に	6.0
人生に共に⇒空気のような存在	4.4
人生に共に⇒心の支え	3.9
イメージ同じ	22.2
ポジティブ（1～12）⇒ネガティブ（13～16）	13.9

選択肢

1	親しい友人	ポジティブ
2	人生に共に立ち向かう	
3	一心同体	
4	趣味を共有	
5	経済的に頼れる	
6	父親のように保護	
7	心の支え	
8	性的に魅力	
9	子どものように甘える	
10	空気のような存在	
11	可愛い	
12	家事・育児に協力的	
13	世話がやける	ネガティブ
14	自由を束縛	
15	経済的に頼りない	
16	そりがあわない	

婦関係の「質」にほとんど影響がないことが明らかとなった。

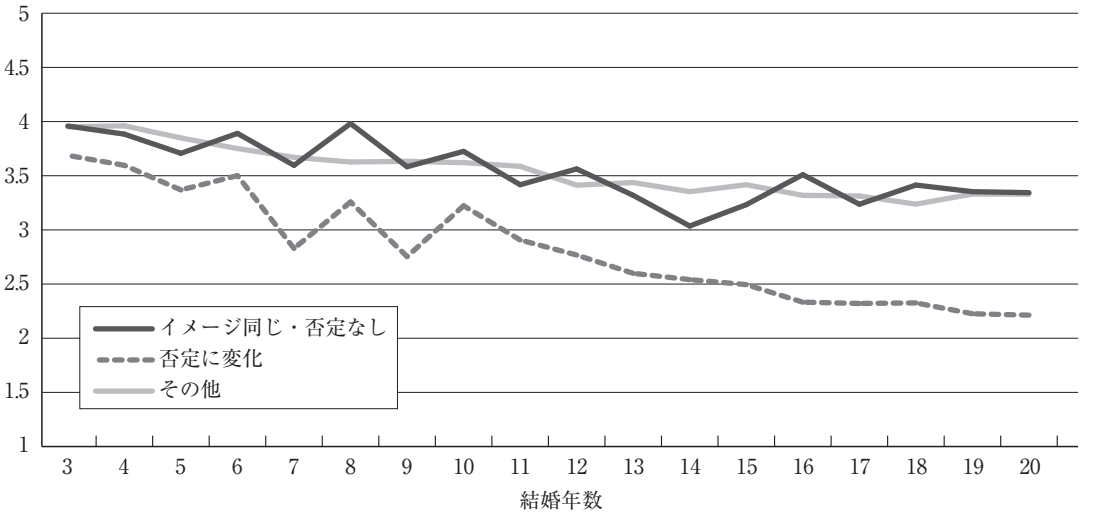
(2) 夫のイメージの変化と夫婦関係満足度

最後に妻の夫に対するイメージの変化のパターンについてみてみよう。ここでは、初婚継続回答者で、夫のイメージについて両者を回答している者（432人）について、第1回と第19回の18年を隔てたイメージの変化をみてみよう。まずそれぞれ上位5つまでをみると、第1回調査での夫のイメージは、「心の支え」（34.5%）、「子育てや人生に共に立ち向かう同士」（21.8%）、「親しい友人」（13.3%）、「一心同体の人」（12.1%）、「空気のような存在」（4.2%）となっている。一方、第19回調査では、「人生に共に立ち向かう人」（24.2%）、「心の支え」（15.5%）、「空気のような存在」（13.7%）、「親しい友人」「そりがあわない」（同率で7.5%）、「世話がやける人」（6.8%）となっている。「子育てや人生に共に立ち向かう同士」と「心の支え」の2つが両時点で最も多く、選択肢の中から配偶者との精神的な結びつきのイメージが選択されている。しかし、第19回調査では（結婚18年目以上になっている）では、「そりがあわない」「世話がやける」などのネガティブなイメージの選択肢も上位に入ってきている。

2時点でどのような変化パターンがあるのだろうか。15×16の組み合わせのすべてを示すことは省略し、出現頻度の多いパターンをみると（図表-7）、順に「心の支え」で変化なし8.8%、「心の支え」→「人生に共に立ち向かう人」7.6%、「人生に共に立ち向かう人」で変化なし6.0%、「人生に共に立ち向かう人」→「空気のような存在」4.4%、「人生に共に立ち向かう人」→「心の支え」3.9%となっている。また前述も含め、第1回と第19回でイメージが変わっていない者は全体の22.2%、第1回では1～12のポジティブな選択肢を選んでいたが第19回ではネガティブなイメージ（世話がやける、自由を束縛、経済的に頼りない、そりがあわない）を選択している者が13.9%となっている。約2割は（どのようなイメージであれ）20年近く経過していても夫のイメージが変わらないが、約1割はネガティブなイメージに変化しており、多くがU字カーブの底にあたる時期でも夫のイメージまでもが悪くなっているわけではないことは興味深い[9]。

サンプルが少ないが、第1回調査時点で結婚4年以内の新婚期だった者（161名）に限定し、2時点間の夫のイメージ変化を、イメージがポジティブのまま同じだった者、ポジティブからネガティブに変化した者、それ以外の3グループに分けて結婚3年目から20年目までの夫婦関係満足度をみ

図表-8 夫のイメージの変化パターン別　夫婦関係満足度の推移



注: 対象は第1回と19回ともに有配偶で、全回の回答が揃っている者
「イメージ同じ・否定なし」は、1993年と2011年ともに夫のイメージが1～12で変わらない者(21.9%)
「否定に変化」は1993年は1～12であった者が、2011年には13～16のいずれかに変化した者(15.2%)
「その他」は、それ以外の変化パターンの者

たのが、図表-8である。なお、該当数が少ないため、ここでは夫の年収を統制せずに分析した。

グラフをみると、第19回調査で夫にネガティブなイメージをもっている妻は、結婚当初からやや夫婦関係満足度が低い（統計的な有意差はない）。そして徐々に他のグループとの差が開き、結婚12年目以降での格差が顕著である。否定に変化したグループは該当数が少ないため結果には留意が必要であるが、他のグループでは結婚経過年数とともに下降傾向であるものの、ゆるやかな下降であるのにくらべ、夫のイメージがネガティブになっているグループでは夫婦関係満足度の水準が低いだけでなく下降の傾きが大きいといえる。

6．まとめと今後の課題

本稿では、妻の夫婦関係満足度の中長期的な推移を、結婚に至るプロセスや結婚の状況に注目して観察するとともに、夫のイメージという妻の主観的な評価の変化という2つの点から確認した。日本でも夫婦関係の「質」への関心が高まりつつあるが、計量的な基礎データを提供することを目的とし、JPSCからは以下の4つの傾向が確認できた。1）夫婦関係満足度はU字カーブを描くのではなく、漸減傾向であること。2）出会いのきっかけや交際期間は、その後の夫婦関係満足度に差異をもたらさないこと。3）本人の結婚年齢やどのような時期に結婚するのかは、夫婦関係満足度に影響をもつ可能性があること。4）夫の存在は、結婚初期でも20年近く経過しても、「人生に共に立ち向かう」「心の支え」であるという精神面での結びつきのイメージを持つ者が多いが、20年近くの間に、世話がやける、経済的に頼りないなどネガティブなイメージに変化していた者では、夫婦関係満足度の低下の度合いが大きい。

基礎的な集計ではあるが、夫婦関係満足度はそれまでのカップルとしての蓄積でスタート時点から差があるわけではなく、まさに結婚生活の実践の中で評価されていることを確認できたことは意義があるだろう。また、JPSCの分析からは晩婚の者は、結婚生活に対する評価がシビアとなる傾向も見出せた。出生コーホートあるいは結婚コーホートでの差をどのように理解すべきか、さまざまな要因を検討する必要があるだろう。本稿では、

十分に議論できていないが、現時点のデータでは、後生コーホートほど早婚あるいは標準的な年齢で結婚する者の軌跡を捉えている。そのようなグループで夫婦関係満足度が高いということは、後生コーホートで有配偶となる者とは、（配偶者も共に）結婚生活を選好し、そのため、安定的な夫婦関係の持続が可能となっているのではないだろうか。そうではない（晩婚や未婚）女性は、そもそも結婚生活に対する期待が低く、結婚しても満足度が（全体よりも）低位安定で推移していくと考えられ、家族生活あるいは配偶者への選好≒期待の高さによって、夫婦関係の質も大きく異なっていくだろう。

今後は、パネル分析の手法を用いるなどさまざまな要因を統制したうえで、上記のような諸要因による夫婦関係満足度の推移を確認していくことが必要である。また、調査回を重ねるごとに、より長期継続している夫婦関係を捕捉できるので、さらに積み上げたデータで分析を重ねたい。

注

1）管見の限り、日本で同一世帯や個人を長期追跡している調査として、「子どもの発達と家族の精神保健に関する長期縦断研究」や、「職業とパーソナリティについての長期追跡パネル調査」などがある。
2）ただし、現代の見合い結婚は、見合いであっても「恋愛」を経て結婚へと至ることが以前とは異なるため、その境界は曖昧である。
3）たとえば、アメリカでは学術研究の成果をもとに、夫婦カウンセリングや家族に対する教育プログラムがたくさん開発されており、2000年代では実践や政策への還元を志向する研究が増えている（Fincham and Beach 2010）。
4）調査回は、第2回、第3回以降は奇数回のみ、第10回以降は毎回尋ねている。本稿では、質問がなかった調査回を非該当として処理した。そのため、コーホートAとBでは結婚年ごとの回答数にばらつきが大きくなっている。
5）より精緻には、子どもの有無ではなく子どもの年齢（ライフステージ）が重要であるが、十分なサンプル数を確保できなくなるため単純化した。また夫の年収については、他と比べて欠損値となる場合が多い傾向があり、同じ継続回答者の中でも分析に必要な情報が揃う回答者という偏りがある可能性を慎重に検討する必要がある。
6）「適齢期」は、「平成22年度「出生に関する統計」の概況――人口動態統計特殊報告」（厚生労働省）による、コーホート別の初婚年齢のピークをもとに、以下のように設定した。1960年前半コーホート24歳、1960年後半コーホート、1970年前半コーホート、1970年後半コーホート25歳、1980年前半26歳と、全体で2歳分、晩婚化している。ただし、後生コーホートでは、ピークがそれ以前のコーホートに比べて集中していないこと、また現段階では未婚者も多く、コーホート全体ではさらに晩婚化する可能性があることに注意が必要である。
7）ただし、「パネルデータではU字カーブとはならない」と結論することにも慎重になる必要があるだろう。JPSCの特徴であるのか、他のパネルデータでの検証を待ちたい。
8）サンプルが50以下になる場合は表記していないため、集計ごとに結婚年数が異なる。
9）もちろん、妻の本音ではなく規範的な回答であるという解釈も考えられる。しかし、多くのカップル調査では夫より妻の方が関係をシビアに評価する傾向で一貫しており、実態に即した妻の認識を示していると思われる。

文献

稲葉昭英，2004，「夫婦関係のパターンと変化」渡辺秀樹・嶋﨑尚子・稲葉昭英編『現代家族の構造と変容――全国家族調査［NFRJ98］による計量分析』東京大学出版会，261-275.
――――，2011，「NFRJ98/03/08から見た日本の家族の現状と変化」『家族社会学研究』23（1）：43-52.
岩井紀子・佐藤博樹編，2002，『日本人の姿――JGSSにみる意識と行動』有斐閣.
岩澤美帆，2010，「職縁結婚の盛衰からみる良縁追及の隘路」佐藤博樹・永井暁子・三輪哲編『結婚の壁――非婚・晩婚の構造』勁草書房，37-53.
上子武次，1993，「結婚満足度の研究」森岡清美監修『家族社会学の展開』培風館，289-302.
木下栄二，2004，「結婚満足度を規定するもの」渡辺秀樹・嶋﨑尚子・稲葉昭英編『現代家族の構造と変容――全国家族調査［NFRJ98］による計量分析』東京大学出版会，277-291.
永井暁子，2005，「結婚生活の経過による妻の夫婦関係満足度の変化」『季刊家計経済研究』66: 76-81.
――――，2011，「結婚生活の経過による妻の夫婦関係満足度の変化」『社会福祉』52: 123-131.
Fincham, F. D. and S. R. H. Beach, 2010, “Marriage in the New Millennium: A Decade in Review,” *Journal of Marriage and Family*, 72: 630-649.
VanLaningham, J., D. R. Johnson and P. Amato, 2001, “Marital Happiness, Marital Duration, and the U-Shaped Curve: Evidence from a Five-Wave Panel Study,” *Social Forces*, 79: 1313-1341.

たなか・けいこ　公益財団法人 家計経済研究所 研究員。主な論文に「「友人力」と結婚」（佐藤博樹・永井暁子・三輪哲編『結婚の壁――非婚・晩婚の構造』勁草書房，2010）。家族社会学専攻。（tanaka@kakeiken.or.jp）